

防衛機制における「置き換え」に関する一考察―「葛藤」に焦点をあてて―

1230415 上田 侑莉加

指導教員 上村 浩

研究背景

現在国際的な問題となっているロシアとウクライナにおける紛争などをみると、紛争を正当化するための置き換えの論理（スケープゴート）がその背景に存在しているのではないかと考えられる。プーチンは当時、ソ連のトップ官僚であったためソ連に対してプライドがあった。ベルリンの壁が崩壊し、西側諸国に飲み込まれたことでソ連が崩壊し、ここでの屈辱によって、西側諸国に対する遺恨をつのらせたと思定される。ここで NATO にウクライナが加盟表明したことが引き金となり対立が起こったと考えられる。しかし、軍事進功には相当の理由が必要であり、ここで、「ウクライナのナチ化やロシアに対してテロを起こすかもしれない」という根拠が薄弱な論拠を「置き換え」として利用したものと考えられる。

研究目的

上記の背景から、本研究では、皇室における婚約・結婚問題を取り上げ議論の対象がどのように移り変わっていったのか、またどのような「置き換え」が生じていたのかについて考察する。特に、報道時は祝福モードであった世論がなぜ批判的になり、その裏にはどのような出来事があったのか検討する。

検証

初めの結婚報道から、正式な結婚記者会見までの重要な記事を取り上げ、その時期の背景を整理していく。すると、K 氏の母親の金銭問題が発覚した背景には、「森友学園」の問題や日産自動車の会長の逮捕、消費税の引き上げがあった。これらの出来事により、国民は、政治に対する不信感や不正に対する嫌悪感、経済的な負担を感じていた。これを、防衛機制に基づいて考察していく。すると、「消費税の引き上げによる経済的負担」や「政治に対する不信感・不正に対する嫌悪感」を対処するために、K 氏の母親を攻撃対象とする「置き換え」が行われていた。

結論

その時代の背景や社会情勢と関係して、スケープごとの批判対象が変化していく。そのため、ある出来事に対する感情は、「置き換え」や「投影」などによって、本質的な問題とは異なる対象が攻撃対象になる場合がある。この問題に対処するためには、「葛藤」を生んでいる背景を十分に理解し、これを解消する文脈と同じ文脈において解決策を提示する必要がある。